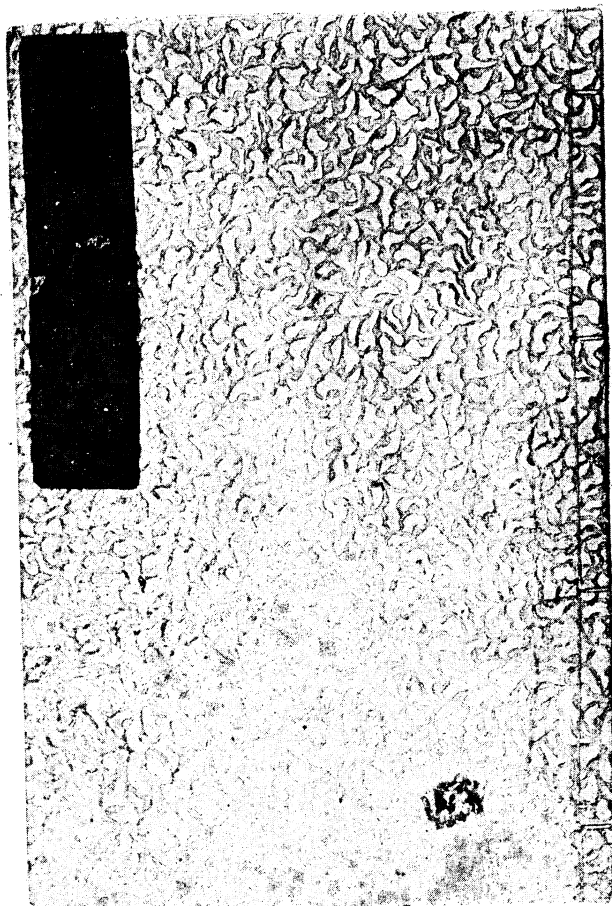




分八寸三	コ	ヨ	紙	表
分七寸五	テ	タ		
分二寸三	コ	ヨ	粹	文
寸	テ	タ	本	

春郭裙屐多ク。

紅塵凝テ浮バ

ント欲ス。香

華大蘭若。歌

舞小楊州。花

ハ遶ル寺邊ノ

寺。柳ハ連ル

樓外ノ樓。此

ノ鄉宜ク醉死

スベシ。佳酒

ハ碧トシテ油

ノ如シ。

象山春日雜咏

猿赤山人

春郭多裙屐紅塵凝欲浮
香華大蘭若歌舞小楊州
花遶寺邊寺柳連樓外樓
此鄉宜醉死佳酒碧如油
象山春日雜咏猿赤山人

このこかねのさとはるのゆふばえは。
 わか友猿赤が名におへるさるのしり
 のあか本めかして書るものからへた
 のたくみのかんもあらためずお開
 所こさ子エ江戸ことばはナンダバカ
 ラシトおとがめなくア、是ものとか
 なるみ代の春にうかれ幽谷を出て番
 木にはいまだうつらぬ藪鶯かたこと
 まじりの一曲も同じころの友をも
 とむる心ざしはひなも都もかはらじ
 と四方の君子かれがさがしらを憎み
 たまはず其もとめさんにあはしてや
 るといひつぎかたりつぎつゝひろめ
 てたまひねかし。

嘉永三とせといふとしの正月

友人狂迂しるす



金娘春乃夕榮

役貫

猿赤居士戯編

第一回

島原芳原もない象山に。人を動す花もさくトハ。予が友狂迂痴叟がよしこのにて。花も解語四季の春。むれ来る客を松尾街。五百の長市と名付しは。すんどむかしのののの事にて。今は屋敷もア、三千て。魚鱗につゞく薔こそ。げに小浪花ともいふべけれ。朝まだきより焼立る混堂へ入来る少年。芋淨瑠理は古いとて。薺菜のやうな常磐津もあたまた天邊にこびきけり。中にませりし賤娼の風俗。くさしあかしの月のまる良。首すちさへもあかつきの。眠りたらさる海棠は。からの美人にあら

ねども。アノ家猪くふた口中に。臭氣ばかりは似たりけん。その次は。ぼたもちすきそふな人相にて。足のごかつくあるきふり。立ば立白。すはれば引白。これを蘭人に見せたなら。スワルトバアトルといふならん。その次は。丹波の國より生捕ました鬼娘のやうな麻面。草鞋でふんだ板橋の。霜の如なる白粉の。凹凸の中に残りしを。ぬか袋にてみがきつ。×梅吉さん。アノ小松さんトあひ寐間はモウおよしヨ。△ソリヤどうして。×イヤ。ゆふべ。アノ兄の浪聲のおかげで。し。まつり。三丁も四丁も五六丁もオヤとぼしたわいな蠟燭を。△オヤお

かしい子。ふんやとやらいふものは。杜宇じやないが。一聲はイ、ガ。やたらになくとイケチエゼ。×イヤモ八千八聲なきあかしは。むねがわるくてへどゝきすところいふべけれ。トしやれて居る門口より。こま辰の音クハラノと。多くの人の魂をふみくだき来るふたりの歌妓。一個はキイタうへだ嶋。藍弁慶に黒縶子の。襟にかゝりしあらひ髪。つやも奇麗に玲瓏。茶金石の簪。チョイと横へ。少し年まのやうなれど。眉毛も梨の花一枝。雨を帶たる淡粧。いろけは蟻の穴よりも。千兩づゝみも崩べし。一個は。その妹分と見え。まだ初春の咲かねし。櫻の艶に梅の粹をば一味加へ。氣に入らぬ風にはなびかぬ柳ごし。いかな阿難尊者でも。ムツと煩惱おやし立て。還俗する氣になるぞかし。況て凡夫のドラ達。うは氣心の二つもじ。牛の角もじ。

。風呂を出るにも出られはせす。ストンとこまる風情なり。

第二回

爰に。玉藻屋象之助といふ通客あり。玉の扨。底／＼から。みがきあげたる顔は。光る源氏の君にも。をさ／＼おとらぬ色男にて。天下第一といふ美人を。掌中に入んといふ大願をぞおこしける。その美人といふは。三十二相悉く具足したる中にも。膚のよきをもつて極上といふ説を出し。光明皇后の故事にならひ。日々に風呂屋にいたりて。千人の女をためしけるが。今此小妓が姿を見るに。身の美しき事。芙蓉の露に咲るがごとく。一點無瑕の玉子のむき立。秀色可餐肌なれば。流す涎は三千丈。ともに白髪を生るまでと。心の内に思ひつゝ。箱火鉢によりかゝり。吸付煙草のうすけふりを運環

の輪にニツツ。吹出して居る處へ。かの姫も。心はすこしあり原の。中將さんよりイ、男。トはてはさすがの吉粹も。やばなおほこの處女の如く。はづかしそうにそばへより。小妓「ア、湯があつかつて。上氣しましたヨ。もしはゞかりながら。その御扇子チョツトかしておくんなさいまし。トいへば。象之助も其道には如になき男なれば。魚「イヤ。あなたのやうな全盛のお手に觸ますとは。あふぎにうれしうございやす。トわたせば小妓は。「ヲホ、ト手にとり見れば。親骨にたとへのいでも行末ひろくぬしに扇が樂しみよ 狂迂トかいてあれば。大妓は見て。「ヲヤ／＼。これは松里さんがこの間作つたよしこのだよ。小妓そんなら。あなたは松里さんのお友達かへ。ト嬉しそなる心の内。看官よく／＼推し給へ。

第三回

銀の目貫の太刀の鞘橋を。西へ渡れば名にしおふ。金の郷の春けしき。慾の世界の極樂園。輕薄郎の魂も。この里に宿がへし。有頂天人を欺く姫花の如くに粧ふたり。わけて花橋屋といふ青樓は。びいどろさかしにつり燈籠。一向宗の佛壇よりも。まだうるはしき座鋪にて。金ほど光るあが佛。トうやまはれ来る通人は。松里といへる粹の骨長。玉藻屋象之助を伴ひて。幫間も兼てより待まうけたる亭主の狐右衛門。ヲツナあたまたまの。四入金くれんとぞはひかゞみ。奥の茶室へ通しける。こゝは象山の天狗達。翅をやすめる杉柱。かけ花瓶に朝貝の。一輪咲し投入も。利休が流れをくんで来る。喜撰一椀のむうちに。咄咲に間にあふ鉢肴。はやあひたいのさし身より。外にうまみの

赤貝は。ヲ、盛氣樓を金糸にぬひし。
はでな衣裳の藝妓の小富士。姉の鞠江
ともろともに。二階のはしご。トコト
ンあがれば。松「コレハ」。珍春亭の
御馳走に。楊貴妃さんの御入來トハ。
どふもいへぬ。サア玄宗皇帝がお待か
ねジャ。ト象之助がそばへおしやれば。
小富士は嫣然ト一笑し。からくれなゐ
の襟くつろげ。半分あけし金扇で。ふ
たりかけもちに煽ぎつ。象之助をし
り目に見て。小富士「あなたは。いつぞ
や。風呂屋で御目にかゝりましたナ
ア。松里「ハチ。おそろしい眼力じやナ
ア。ト弥庵六のこなしになれば。小富士
「あなたは。いつでも。程がよしつねさ
んじや。松「イヤわつちばけふは弁慶で
ございやす。ト「いろ／＼しやれて酒となり。
舞たり。舞たりすれど。こ
に。抑この小富士といふひめは。色
藝ともにならびなき全盛にて。多くの
客をふり袖の。容易に帯をとかされば。

人仇名して高根のさくらといふ。その
心は手折がたしといふ事なり。されど
象之助にはほれきつて。はや色に出る
薄紅梅。ほろよひきげんのかはいろを。
松里はそれと見てとりて。下女をよんで。
耳をねれば。はや用。松「サア酒は量なし。
意をやりたりけん。
サモウ初學とこに入と出かけよふ。象
「イヤノ。實をけんとして。色に易る。
と。イヤラント。拳松「ソレデモ。妓を見て
爲さるは男なしダ。トむりに一間へお
しこめば。極彩色の金屏風。鴛鴦のつ
がひの翼をならべ。いつしか。雨
の夢。送に心とけ／＼ど。雪の膚にう
すけふり。空焼物の下襷。おもひ染こ
む摸樣さへ。ぬしといつしよにや。梅
や。ツイ一聲の鶯の。の樂
しみは。ア、きみが代のしるしなり。
折から開ゆるのに。金釵
のおとカチ／＼。

第四回

つりばりのやうなかしくで釣りたら
す。網まで張りし伏猪亭。いつか阿漕
の浦ならで。たび重りし象之助。嘶も
つもの雪の朝。象「ドリア歸らふ。ト帶
引しめ立あがらんとするをりしも。の
きばの竹のくづれ雪。ドツサリ枕にひ
ゞきければ。小富士は驚き抱き付。ア
ノ古い文句であります。たとへん年季
がますかとて。けさの寒さにかへさり
よか。トうま味を含みしその笑貝。チ
ヨンボリあきし唇のなかへ。とんと命
も奔。深く込りし象之助。胃の口舌に
立腹も。さつばりわすれて居る處へ。
下女のお萩。こたつの火をもつて來て。
お萩「面白妙の雪げしきでございます。
ト襟側の障子さつとあくれば。象「ア、
寒い。香爐筆のゆきはむかしの事
だ。ヤツバリ障子をしめておくんナア。

そしていそいで燭をおたのみ申やす。

お萩は。ハイ。トイふうちわ。トン／＼あふぐ泥爐は香芹のかをりに鴨の脛。みじかき冬の日もたけて。午の貝ふくころになりければ。象之助も腰をすゑ。いつそ手形もやけまくで。二寸きらるゝ覺悟の居續。さいつ。おさへつ。水いらす。酒しは鍋へさしかげんも。女房きどりの小富士が塩梅。あまい辛の世態の味も。まだしら齒はそめねども。紙を引さき眉毛をかくし。モシエこちの人などゝ。勤を早ふひく三紗の。てんとたまらぬ酔かげん。火燵は戀の玉手箱。あけを奪ひしむらさき浦しま。ちりめんの下紐へ。そろ／＼あしをさし込み藝妓。折から二階の下より。姉さんたのんでおくんな。小富士「ハイ旦那は今やすんで居るから。後にいふてあげるエ。」

第五回

かゝる處へ。松里は雪をふみ分けて。あわたしくかけ來たり。袖うち拂ふて。一息つき。松「サア大變ナ事が出來たヨ。象「ナニどうした訳だ。松「イヤおまへの姉夫惠内とは。かはは如來さんのやうなれど。〇がほしいの御念願石の地藏のむなぐらでも。つかむやうな有財餓鬼。おまへの性とは火水の處。此間からのみつゞけが。あまりながいにかこつて。一家親類相談のうへ。しばらく勘當にきはまりし。とさつて象之助はびつくりし。寐耳に水の入たる如く。とんと途方にくれ竹の。朱らうの煙管頼杖につくねんとして居たりしが。松里ははたから氣やすめに。松「ナニサ。大丈夫屈する事もチイゼ。色男金と力はない物ダ。勘當うけた身の上も。イキナじやチエカ。マアかふ

いふ時には一杯のむとしよふ。小富士さん。その燭直して象さんにあげチイカ。小富士は「ハイ。トイひつゝも。燭の中へさしいれし貝を。やう／＼半分出し。涙でしめりし火鉢の火を。紙を折りてバタ／＼あふぎ。とつくりの尻をあふつてさし出せば。象之助はグイとのむ。愁を掃玉帚。雪にあつ湯のかんざけに。しばらくうさをなぐさめけり。

作者曰。雪中の居續。こたつの對酌。ちん／＼鴨のなべやきは。これ人間の喜歡域。されどたのしみ極れば。かなしみおほしのことわり。象之助が身だいいつの間にやら。あし引の山とつみてしたくはへも。今はあらしの吹からに。金のなる木のしをるれば。女郎かひ變じて。ちはやふるかみくづかひにもおとるべし。かくいふ作者も。木から落たる猿なれば。まじめにいふも嗚呼がましけれど。看官。前車のくつがへるを戒とし給へかし。

第六回

去はとに。象之助は浮浪人の身となり
 はて。どこからいでの山ぶき色。せが
 めど／＼くれないなの。花代つもりて雪
 の如く。はらへばきよき袂さへ。今は
 よごれし結城のとてら。はなの内町へ
 は向はれず。やう／＼姑蘇の金山寺。
 夜半の鐘をあひづにて。かよふ所はき
 たなくも。螺の曲の如き巷にて。間口
 三尺の一小樓。ほこりまぶれの木枕に。
 みじかき蒲團よぎなくも。六疊じきを
 三間にしきり。その次の間のあひ客は。
 唐のまねするからけつ醫者。和漢蘭語
 をなひませて。「コリヤ／＼老婆。風流
 瘡のない女をきまつてくれ。酒と肴も。
 ついでにたのむ。と懷中より木守の南
 一とり出せば。老婆は受とり。しばらく
 く有て。調のへ来る鉢の肴は。みかん
 に肉餅五ツされ六され。箒上の雁のや

うに組排べたり。醫「コンナ物は美くナ
 イ。鰻か。鰻は子イカ。老婆「ハイ別
 のお肴はモウございませぬ。醫「ナニサ。
 べつといふはすつばんの事だ。俗人と
 いふものはドウモならぬ。「ハイ鰻
 はありませぬが。鰻はどうでござい
 す。醫「イヤその五四六は大の禁物じ
 や。ゆふべも大壯はりこんで。殆裸躰
 に及んだ。それより。とかく易物がよ
 ひ。淮南ダ。ト湯豆腐で小半合酒をの
 みつくし。「ア、頗ドロンケン。と聲
 はりあげて。

子夏と顔さへ見る事ならぬ誰をた
 のんで関子齋。猿赤
 その又次の其客は。色も青田の苦博打
 うでのくりから自慢にや。廣袖葛衣片
 はだぬぎ。の酒を手にもつて。
 「アノ聲はナンノお経ダ。△ばかア
 へ。アリアよしのこだヨ。△エ、ア
 ノやうな塩辛聲が酒の肴になる物か。

と江戸ッ子風のちきばして。河豚の湯
 をくらひつゝ。△ア、鰻の味ひは又
 格別だ。雪のふぐ豈一命を惜まんや。
 トハヨクいつた句だノウ。△「イヤ河
 豚汁にあなたを命をすてんより。わしや
 いき鯛をくふほうがよい。△ソレデ
 モ。標鉄の中に。西子といふ美人の
 乳のむまさに。たとへて有といふがエ。
 △「ナニサ。アレハ毛唐人の寐言ダヨ。
 日本魚の親玉とは鯛の事だ。それを
 すてゝこれをくふトハ。内の喉をそで
 にして。外で女郎かひするやうなもの
 だ。△「フン。もしあたつたら。かさか
 いたやうな物かへ。そりやそうと。兄
 貴。例の彦妻呼にやるか。△「ヲケノ
 手めへのやうなトンチキ野郎に。ござ
 る姫があれば。立た柱に花が咲くツイ。
 △「イヤそうもいはれぬ。劍菱や薦きて
 人がすくぜ。トしやれて居る處へ。亭
 主習仕切をとりにくれば。△「こよひの

仕切はこの通りダ。ト鍋ををしへる。
亭主ふぐにくれるといふ事か。キイヤ
鉄砲ダ。幸「モウその毒氣には。たび
／＼こりて居るカライヤダヨ。と河豚
のやうにつらふくらせば。ひとりの生
醉むつとして。金の代りに地がねを出
そふ。ト火鉢をとつて打かへせば。火花
は四方へ飛びちりて。何がやけるかしら
ぬ火の。只一面の沖となり。あひの屏
風バツタリたふれば。以前の醫生新造
に。帆柱し。ふんに波をうす
へて虎溪の三舂。笑ふ門のふく着。和
睦の酒となりければ。みな／＼ともに
酔たふれ。しの字。くの字に打ふしけ
る。これはさておき。小富士はかの銅
山の客人を欺。みな象之助に身あがり
の。雲雀の床にかよひちも。いつしか
首尾のあしくなるを。やう／＼翰江が
はからひにて。今宵は夜ふけて来りし

が。小樓のいふせきは有明の灯已にき
え。破窓の紙ビラ／＼風に閃あなよ
り。さしこむ月のあかりに見れば。象
之助が待かねて寐入りし泉の。いつも
よりは瘦たるやうに見えければ。みな
わしゆるの苦勞かと。思へばいとど可
愛さの。心のたけの長じはん。そつと
寐床へはひる折しも。屋棟の上に鳥の
聲。カイ／＼／＼／＼。

第七回

光次は業平よりもイ、男。ト古人の金
言うべなる哉。されば三味線しらす。
芝居見す。藝なし猿のやぼ客も。たゞ
○印さへあれば。いかなる美人も。ッ
イ手いけのはなになる物なり。爰に。
銅山の大盡。小富士をしば／＼口説
といへども。心づよくも肌ふれざれば。
終には千金を抛ちて。根引にせんとひ
しめきけるが。元來小富士が親方は。

威猛屋の長爪虎と綽号の付しほどの人
物にて。銅臭をしたふ事。蟻の西瓜の
皮に附が如ければ。早速相談きはまり
けり。小富士はそれとときよりも。ほん
に身も世もあられふる。涙を袂につ
みかね。けふは持病がおこりしとて。
奥の間へ立籠り。よぎ引かづきて打
臥しける。翰江は薬に事よせて。枕の
そばへそつと来て。翰江「今象さんが格
子へ来たが。なんぞ用事はないカエ。
トいはれてうれしく。首をあげ。小富士
「モシ姉さん。これを渡しておくんな
ア。ト小菊の紙に紅筆で。はしりがき
なるそのぬも。半はなみだにしめりけ
り。かくて。其夜も更わたり。薙子
の太鼓もやみ。お茶をひいたる藝子の
釵も。屏風に觸る折からに。小富士は
起て脊戸をあけ。飛石傳ひのさし足も。
心のそこの深み草。胸へさしこむ芍薬
の花壇を廻りせんすいの。葛蒲もわ

かぬ戀のやみ。さぐり／＼て橋をこえ。誰がよい中へ垣つばたの。汀に生ふるうき草の。あすはむかふの岸に咲。トおもへばいとど打しをれ。露もかはかぬ朝貝架。ほんにうき世も秋萩の。しをり戸あけて忍び出る。外にはそれとすいせんの。はなの垣ねにたゝすみて。待かねて居る象之助。よひのぬにて約束し。つれてとも／＼飛梅の。心づくしのはてまでもと。にげゆくむかふの木かげより。あらはれ出たる五六人。黒装束に面をつゝみ。「ヤア穴落人をのがすな。と引執へて轎へのせ。いづくともなく飛行けり。

第八回

人間萬事塞翁が馬／＼。ト首尾よく計りおふせ。その行ききは夏木村の中ほどにて。卯の花垣にて表をかこみ。庭のやり水きよらかにながれ。かきつばた

のはなかげに。金魚のおよぐも奇麗に見え。ほどよき處へかけ橋も。風流めきた住居なり。内の様子をうかがへば。銅壺火鉢を拭立て。塵一點も霞がたの。鉄瓶に雨ふる聲のきこゆるは。ふだんたぎれる湯なるべし。家内は年比三十四の。氣のきつた女の童に。猶兒一隻のその外は。猫ば／＼爺の類もなし。座しき口の二間のふすま。微塵砂子の仕立ち。四季の草花のかきませも。圓山風の密畫なり。ふすまをあくれば鼻さきへ。ポットかせるは青磁の獅子の。口から吐しけふりなり。床には文具を位置よくかざりし。側に。琴一張を置たるは。コロシヤントころび寐の。誰と調子か合すみ家。ト小富士はあやしう思ひし處。一間の内に聲ありて。其譯くはしく語らん。ト立出たるはこはいかに。銅山の客人なれば。小富士はいよ／＼驚しが。其人扇を笏に

とり。「抑こんどの狂言は。小富士さんが心底をさぐらん爲の計。その作者は松里先生。此榎井藻海はちやり敵トかぶりし頭巾をとすつれば。あたまばかりはあか／＼ね山。元としたる禿坊主。七賢人のなかまのやうな。竹林の裁醫師なり。小富士は事の始末をきつて。魔夢のさめたるこゝちして。いそ／＼したる折こあれ。出入りの料理屋。ハイ御肴が出来ました。ト三ツ四ツさげくる鉢さかな。酒のかんさへい、塩ばい。トみな／＼ともに悦びける。

題辭

漫ニ驥オヲ

屈シテ蟻垤

ヲ營ム。乾

坤到ル處執

カ知音ノモ

ノゾ。陽春

ハ入ラズ時

人ノ耳。一

卷ノ狂文萬

金ニ値ス。

笑叟

題辭

漫屈驥寸營蟻垤乾坤到
處孰知音陽春不入時人
耳一卷狂文值萬金

笑叟

象山乃麓に猿ありぬ。其名龍宮にさ
 へ響て。膽をつぶしぬ。智は孫吳空にま
 ざる。猿冠者といはんか。太良冠者にあ
 らねど。大名もうかる。うつぼざる成
 べし。さる程に。こゝにいはざる色の黄
 金の里。こゝろもうごく春の夕榮。これ
 なん又とあるか。あるな。贅なまたとあ
 るか。ひな。よめ女房の色。青春情。見るに
 あかざる。いふにいわれざる。きくに
 まだきかざるあり。三馬がくゝり猿も
 たかをくゝり。此赤本にしかざるは。あ
 らじとしかいふ。

庚戌の夏小簀ほしげなる卯の
 花雨のそぼふる日

庚戌の夏小簀ほしげなる卯の
 花雨のそぼふる日

安原の夏澄誌